

てみたら、

「焼きます、家族が多いから焼いて置いて秋頃まで食はせませす。尤も家族といっても半以上は猫です。近頃は半分減ってますが、まだ十二三匹ゐます」

おそろしい猫好きもあつたものと驚いてみると、男は忽ちニコニコして声をひそめて、

「ところが二三日前、その中に三毛の牡が一匹産れたんです。妙なもんでしてね、……三毛の牡なんてものはめつたにないだけに親猫の方でも驚いたのか、其奴に乳を吞ませなくて困りますよ、どうも心配です。然し何処から聞いたか早いもんで、昨日も相場師とかいふ男が来て是非譲ってくれろといふんですよ。なかなか三毛の牡なんていふものがそうおいそれと譲れるものですか」

と余程得意に見えた。

雑魚の登りが一層盛んになると、世にも珍らしい此の猫好きの一族は、昼間だけの漁には堪へないで夜も出掛けて来て橋の上で夜を徹してやってゐるやうになった。夜が更けるまで涼しい橋の上に椅子を持出して話してゐる私の家の人達は、涼み台や毛布を妻君や娘達に持たせて出漁して来る猫の主の来襲に驚いて、匆匆家へ退去することが屢々あつた。時々夜を更かして戻る私が橋を渡りながら、「御勢が出来ますね」と声をかけると、「やッお喧しいでせう」と彼は威勢よく応へた。朝々の露に濡れた橋の上にマツチのすり殻が白々と散らばつてゐた。

秋が立ちそめて川狩りの子供も少なくなつた或日久し振り

橋の上で猫の主に逢つた。その時は傍にぶつたいを持つた姉妹の姿も見えなかつた。猫の主は、乳が足りなかつた因でとうとう三毛の牡が死んだといふことを悲しげにくどくどと物語つて、せめてもとアルコール漬にして保存してあるといつて惨として大きい眼をしばた、いた。私はガラス瓶の中に眼をむいてグシヨグシヨになつて漬つてゐる小さい動物の死態を眼に浮べて、おかしくも又いたましくも思はれた。見に来てくれといふのを私に辞られて、とぼとぼと帰つて行く彼の後姿は淋しかった。

(大正6年・曲水1—8)

稲 盗 人

村中の大騒ぎになつた。怪しい怪しいと噂のあつた藤作が、やっぱりこの間中の稲泥棒にきまつた。空惚をつかつて藤作の家の納屋の中を覗いてきた仁三郎さんの家の下男が、息せききつて戻つてきての話では、前の晩仁三郎さんの田に刈干しにして置いて見えなくなつただけの稲が、ちゃんと藤作ん家の納屋の奥にあるといふことであつた。稲泥棒は藤作にきまつた。太へ野郎だ。下男は隣り近所へ大声に触れまわつた。噂は野火のやうに村中に拡まつて寄るときはるとこの話でもちきつた。小学校に入つてゐる藤作の忰も、泥棒の兎といふ名を貰つて、毎日べそをかいて家へ帰つていった。いつかの夏の梨泥棒も彼奴